

帖佐悦男 編

アスリートを救え

スポーツ外傷・障害の画像診断 完全攻略

菊地臣一（福島県立医大理事長兼学長・整形外科）

超高齢社会を迎えている今、国民の健康に対する関心が高まっている。EBM（evidence-based medicine）は、健康の獲得や維持に運動が深く関与していることを明らかにした。体を動かすことが、寿命、がん、認知症などの健康障害に良い影響を与えることが、関係者の地道な啓発活動により、国民の間にも浸透し始めている。

一方、「体を動かす」ことの象徴としてスポーツ活動がある。近年のスポーツ科学の発達は、トレーニングをはじめ、スポーツのあり方にさまざまな変革をもたらしている。

スポーツ愛好者や競技者への医療に対して、従来の医療は大きな問題を抱えていた。それは、スポーツの医療を、診療現場での医療と同じように対処していたことである。

臨床の現場でも、いまだに「安静」が治療手段として用いられていることが少なくない。EBMでは、「結果」としての安静は別にして、「治療」としての安静には、有効性は認められていない。すなわち、現在の治療では「守りの医療」は、特別な理由がない限り意味を持たない。

一方、スポーツ競技者の医療では、積極的な「攻めの医療」で対処する必要がある。選手に、「競技を休め」と言うのは、一步間違えると、レギュラーの座からの転落や選手生命の終わりを意味する。ス

ポーツ競技の人々が、代替医療に流れる大きな理由の一つがここにある。

こんな世情の中、帖佐悦男先生を代表とする宮崎大学整形外科の方々によって本書が刊行された。宮崎大学整形外科科学講座は、田島直也名誉教授が現役の時代からスポーツ医学に関心を持ち、現場と一体となってスポーツ医学の最前線に立って今に至っている。本書はその集大成でもある。

本書は、スポーツ医学における近年の画像診断の劇的な進歩を積極的に紹介している。また、スポーツによる外傷や障害の診療上のポイントを本書の中で提示し、診療を受ける側への実際の対応も掲載している。

もう一つの特徴は、詳細な症例提示を一つの章として構成している点である。豊富な経験を有している講座ならではの目次立てである。

運動が健康に重要な役割を果たしていることが明らかになった今、本書は、スポーツ医学とその実践をこれから学ぶ人間には良き入門書として、専門家には自らの know-how の確認と錬磨の書として推薦できる。

8,000 円は安くないが、その価値はある。
（B5・頁 228 2015 年 11 月 定価本体 8,000 円＋税
[ISBN978-4-260-02195-1] 医学書院刊）



障害者権利条約の発効記念、黄色にライトアップ

日本が国連の障害者権利条約を批准してから国内に条約の効力が発生した日（2014 年 2 月 19 日）を記念して、2 月 19 日、夜の東京臨海副都心と岩手県陸前高田市の「奇跡の一本松」が黄色にライトアップされた。

東京ではゲートブリッジ、お台場海浜公園などがライトアップされ、フジテレビ社屋の壁面全体を

使ったイルミネーションは黄色に明滅、時折イエローリボンの図柄も映し出された。

黄色は、日本障害フォーラム（JDF）が条約の普及と障害者の社会参加を進めるイエローリボン運動のシンボルカラー。

（福祉新聞・第 2752 号 2016 年 2 月 29 日）